

今も雲林県の農田に灌漑用水を供給し続けている地下水道を敷設

台湾で尊敬される「水道の恩人」瀧野平四郎

本会理事・群馬県支部長

山本 やまもと

厚秀 あつひで

◆「水道の恩人」瀧野平四郎

戦時中、台湾で全島の学校を廻って、自作した教育紙芝居「六士先生」をみせ、また「台湾かるた」を作り、戦後は故郷の群馬県に戻って「上毛かるた」を考案した真イエス教会の伝道師・須田清基すだしきには「群馬県人の遺跡をさぐる」という一文がある。

平成二十七年（二〇一五年）五月、その中に「水道の恩人瀧野平四郎」という掌編を見出した。いささか長い、まず原文のままご紹介したい。

〈嘉義市の奥年六街の奥地に、上州人巡查瀧野平四郎が駐在していた。僻村であるが水がない。小さな溜池の水で御飯も炊けば、洗濯もする。時々水牛も飛び込んで来る。その濁水を漕して飲んでいる。もちろん巡

査も学校の先生もその水を用いたが、余りにも不潔なので村民みな困っていた。瀧野が赴任したのは大正十年頃であったが、何処かに水源地を捜して簡易水道を敷設しようと考えた。だが下級官吏の身であるから何らすることもできなかったが、五キロほど離れた所に小川を発見し、技手に頼んで測量してもらった所、トンネルを掘って鉄管を敷設すれば水が来る事が解った。そこで村民を集めて水道を敷設することになった。そこで村民を集めて水道を敷設することになったが、仲々の難工事であった。だが夫人芳子は賢夫人といわれるだけあって、婦人間に信用が厚かった。彼は夫を扶け毎日のように現場に至り、村民を激励していたが、大夕立のあった時、折角掘ったトンネルが崩れてしまった。もちろん農閑を利用して始めた仕事であるが、こんなことから工事が手間取り、村民の間から

不平タラダラとても駄目だ、水なんか来るものかとい
って反対する者が起って来た。

この時さすが上州男子だ。村民一同を駐在所の前に
集め「もし水が来なかったら、皆さんの前で腹を切つて
わびる」と宣言した。そしてとうとう工事を完成した
が、いよいよ通水したところ、一時間経っても二時間経
つても水が出て来ない。そのために腹切り問題が起つ
た。夫婦もろとも悲壮な決心をした。ところが間もなく
鉄管の中から風が吹いて来て、何やら音が聞えてきた。
そして滝野夫婦を始め村民一同待ちわびていた所に、



探索の決め手となった石碑が写った写真（中央着物姿がよし
夫人、夫人左が瀧野平四郎、右が呉義陣・古坑庄長）

ドロドロの水が沢山
のゴミと一緒にドッ
ト流れて来た。今ま
で反対していた台湾
人も水を見て「万
才々々」と呼び出し
た。そして今でもこ
の村に限り滾々とし
て水が絶えたことが
ない。村民は水道の
恩人として転任に先

立ち建碑したが、一巡査の身で建碑されたものは、上
州人巡査滝野平四郎あるのみ、彼は群馬郡清里村出身

◆「滝野」は「瀧野」だった

冒頭に記した須田清基の一文が滝野平四郎との出会
いである。この出会いの瞬間、私は言葉では言い尽く
せないほどの感動と衝撃を受けたのである。

当時の私は、日本李登輝友の会群馬県支部を二月
十五日に設立し、その支部長に就任したばかりで、そ
れを記念し、七月には北関東ブロック会議が行われる
予定であった（李登輝閣下の来日で延期）。

それは、平成二十七年五月二十九日のことだった。
この日、私はブロック会議のテーマを芝山巖事件で殉
職した六士先生の一人で、群馬県安中市出身の中島長
吉にしようと、ご遺族を訪問、資料をお借りした。こ
の中に、くだんの一文を掲載する雑誌が含まれていた
のであった。余談だが、この訪問が中島長吉の歴史断
絶を防遏したのでもある。

台湾における水事情は水の豊富な日本とは全く異な
る。台湾の地形は急峻で、しかも雨期と乾期がある。
とりわけ乾期の水不足は生活や命に直結している。

一文には石碑の所在地とおぼしき地名が記されており、比較的簡単に探し当てられるものと楽観していた。ところが、「奥年六街・滝野平四郎」をウェブで検索しても全くヒットせず、出身地だという清里村（今の前橋市青梨子町^{あおなしまち}）には伝承や痕跡のかけらもなく、石碑はおろか滝野にもたどり着けなかった。「群馬県人、しかも高崎市出身である滝野の石碑は、いったい台湾のどこに建てられたのだろうか」「この石碑を訪ね、探し当てることは、高崎と台湾の絆につながるのではないだろうか」と、想いだけは馳せていたのだった。

あるとき、ふと「滝野は瀧野ではないか」とひらめいた。これ以降、ウェブ検索がヒットし始めて来た。くだんの一文は、須田清基が八十三歳のときの執筆である。記憶違いや校正ミスがあったのかもしれない。

「臺灣総督府職員系統」で検索した結果、瀧野平四郎は実在し、大正十年に斗六郡役所警察課勤務で警部補であった。台湾の詳細地図を隅々まで目を皿にして搜した。だが、石碑はどこにも見当たらなかった。

◆ 決め手となった石碑の写真

転機は、ご遺族を訪ねあてたことから始まった。ご

遺族には、瀧野のお墓からたどり着くことができた。たどり着けた経緯は正に神がかっており、本稿では略す。瀧野との運命的な出会いは、須田清基により導かれたものであろうと思えてならない。

瀧野は終戦後、妻の実家を頼って引揚げ、賢夫人よし（芳子とも書かれる）とともにここで余生を全うした。なお、実子は授からず、長兄の次女千枝子を養女に貰い受けた。墓は、よしのお気に入りの寺によしの兄が建墓し、今に引き継がれている。なお、よしと須田清基は幼馴染みであった。

瀧野が台湾から引揚げの際に持ち帰っていた写真貼が見つかった。うち一枚の写真（昭和十二年一月撮影と後に判明）が後々重要な決め手となった写真であった。石碑の部分を拡大し陰影を調整して、「水道記念牌、瀧野平四郎、古坑庄長呉義陣敬立、大正十年四月十日」と、碑文のうちの重要な部分を読み取ることができた。あとは石碑をこの目で現認するだけである。

ご遺族との信頼関係が醸成され、妻よし側の家系をまとめることができた。そして、私が友人として石碑を探し訪ねに行くことになった。ご遺族のご夫婦は高齢で体もかなり不自由であり、訪台は困難であった。

◆古坑郷公所の尽力でたどり着いた水源

平成二十七年十一月三日午前十時ごろ、雲林県うんりんの古坑郷公所をアポなしで訪問した。携えたのは石碑の写真、解析した石碑の碑文、須田の一文などである。

たどたどしい北京語で訪問目的を告げ、論より証拠と石碑の写真を示した。彼らの反応は素早いものであった。会議中に飛び込んでしまったのであるが、会議を中止して熱心に対応してくれ、非常な関心を示してくれたのである。そのときの責任者が孫旺田課長そんおうでんであった。ただちに課員総出で調査にあたってくれた。そして、爾後のキーパーソンとなる黄仁勇さんこうじんゆうを呼び込んでくれたのである。

黄仁勇さんは日本統治時代に生を享け、日本語も多少理解できる方で、当時の日本人名を横田泰一と自己紹介をされた。調査の方は午前中に見通しがつくとの説明で、黄意玲郷長こういれい（黄仁勇さんの姪）への表敬訪問と相成った。黄仁勇さんの父、黄朝文さんこうちようぶんは日本統治後の選挙で選ばれた初代郷長であった。

昼食後、孫旺田課長の車で現場へ向かった。目的地の近くで最後の聞き込み確認をして、いよいよ荒地の

中へと踏み込んだ。

そこには、持参した写真の石碑とは明らかに異なる破損した石碑が横倒しになって眠っていた。重機がなければ手のつけようもない。水源には豎井戸たていど四基があり、灌漑用水であろう、取水していた。少々不満ではあったが、辺鄙な場所へ案内されている状況下の成果としては上首尾であると思い、感謝の気持ちを申し述べ、一年後の再訪を約し帰途についた。

ただこの時は、これが伏流水を取り込む方式で台湾最古のものである、とは全く知るよしもなかった。

年が明けて後、鳥居信平とりいのぶへいの二峰圳地下ダムの研究者で、国際的にも著名な国立屏東科技大学工学院院长へいとうの丁澈士教授が炭頭厝圳かんとどうせきしゅうの調査にあたっていることを知り、歴史的かつ文化的な価値があることを知った。今年六月、丁澈士教授らにより、百ページにわたる成果報告書『雲林縣古坑郷炭頭厝圳文化基礎調査豎測繪紀錄』が県政府文化処に提出された。引き続き、豎井戸の内部構造の調査を計画しているそうである。

余談だが、石碑探索で荒地に踏み込んだときには大型犬を伴っていた。瀧野は手記の中で、雨傘蛇、百歩蛇、青竹蛇、飯匙蛇しゃもじなどの毒蛇が多く、水源の探索に

は犬を連れて行き、毒蛇を警戒していた旨、書き残していた。鈍感な私は後になって気がついたのである。

◆瀧野への感謝の心が飲水思源碑に

約束の一年後、古坑郷を訪れた。黄仁勇さんにあの水源地までご案内いただき、びっくり仰天した。何とあの荒地が整備され記念公園に生まれ変わっていた。倒壊していた石碑は修復され、新たに台湾雲林農田水利会の林文瑞会長名による『飲水思源 憶坎頭厝圳』の碑が設置されていた。

〈坎頭厝圳始建於清乾隆年間，引阿里山脈之大湖口溪水入渠以供灌溉及飲用。日明治時期沿襲之，每因颱風豪雨山洪爆發，造成渠道阻塞及毀損。／大正初期，斗六郡役所瀧野平四郎奉命整治水道工程，公元一九二一年，大正十年竣工。時任古坑庄長吳義陣及庄民為感念其德，於同年四月十日立碑紀念。／歷經九十餘載，紀年碑早已斷裂倒伏於荒煙蔓草中，先民治水功績不復後人記憶。二〇一五年十一月，日人山本厚秀受瀧野平四郎後人之託來臺尋碑，幾經訪尋，終得斷碑。／落其實者思其樹，飲其流者懷其源。水利會乃修復斷碑後重新豎立於園區中，以供後人緬懷景仰。〉



雲林縣古坑郷で2016年12月26日に催された掲碑式（石碑から右へ1 林文瑞會長、2・3 黄仁勇氏夫妻、石碑の左1・2 山本厚秀氏夫妻）

碑式の式典に臨んだ。地元農民の方々の瀧野平四郎への感謝の心が、この盛大な式典になった。それが私への歓迎に置き換えられているだけなのである。この坎頭厝圳は今でも三七〇ヘクタールの農田に灌漑用水を供給し続けている。

瀧野は手記の中で、生涯の思い出し、「派出所への帰途、警部補（補注…大人ではない）さん、有難うと云う感謝の声が聞こえた。それだけで充分である」「工事は一時的であるが、利便は永久的なものである」「自分の死んだ後もこの水道の水はいつまでも潤

日本語訳は必要ないであろう。碑文には何と私の名も刻まれているのである。身に余る光栄である。平成二十八年十二月十六日、私は、林分瑞会長はじめ大勢の方々の歓迎を受けて、家内とともに掲

れないであろう」と述べている。

今年五月、群馬県支部の清水一也・副支部長、広瀬洋一・幹事と私を含む八名で再度訪問する機会があった。またまた思いも寄らぬ大歓迎を受けたのである。

◆名庄長の誉れ高かった瀧野

瀧野は明治十七年（一八八四年）七月に今の高崎市箕郷町で分家の三男として生を享けた。実家のスケッチがある。立派な門構えである。東京正則英語学校に学び、のち警視庁に勤めた。明治四十一年（一九〇八



坂頭厩川の全景（手前の円筒が伏流水を取り込む取水用縦坑）

年）七月に渡台し、警察官として斗六支庁（今の斗六市）警務課巡査を振り出しに、現在の台南市・嘉義県・雲林県の各地で勤務した。赴任先では、住民の生活基盤である街路整備に真っ先に取り組んでいる。

昭和十一年（一九三六年）に辞職し、同年に新巷庄（今の新港郷）庄長に就任、終戦まで職を全うした。暴れ川で名高い北港溪の大護岸工事を完成するなど、名庄長の誉れが高かった。瀧野は風貌胆力ともに秀でており、「難問だからと云ってやらなければ、百年経っても出来ない」と、有言実行を信条としていた。

石碑探索を端緒に、台湾雲林農田水利会の林文瑞会長、古坑の黃仁勇さん、新港の林英敏さん等、十指に余る台湾の方々より貴重な資料を提供していただくとともに、大変温かいご支援を受けた。また戸政事務所より、戸籍謄本の提供も受けた。総ての方々に衷心より感謝の意を表したい。

呉正男先生（父・呉開興さんは終戦直後、台湾雲林農田水利会の総幹事になり、のち会長に就かれた）や、高岡法科大学学長（当時）の千々岩力先生、そして地元高崎の鈴木越夫先生よりいただいた励ましは心の支えであった。呉正男先生は今年の五月、私とニアミスで坂頭厩川を訪問された。そして群馬県支部の齋藤秀瑛・監査には北京語への翻訳などで大変お世話になった。

皆様に深く感謝申し上げます。